

# 第1章 戦場

シベリアでの捕虜生活

## 忘れられないぬくもり

松山四郎さんのお話から

○衛生兵 軍隊の中で、医療に関する役目を行う。

○野営 軍隊が野外に陣営を設けること。

○アッツ島 アリユーシャン列島の島。昭和十七年（一九四二年）、ミッドウェー作戦と並行して日本軍が占領。

○玉砕 玉が美しく砕けるように、名誉や忠義を重んじていさぎよく死ぬこと。

○ツンドラ 一年以上連続して凍結した土地。永久凍土。

○艦砲射撃 軍艦に備えてつけてある大砲などから弾丸を発射し、ねらい撃つこと。

私は、昭和十七（一九四二）年七月一日、二十二歳で衛生兵として歩兵第二十七連隊へ入隊しました。昭和十八（一九四三）年五月から第七師団第二野戦病院に編入になり、旭川市の神楽に野営し、出兵の準備にとりかかりました。

ところが、五月二十九日のアッツ島玉砕の知らせのあと、この野戦病院は解散してしまい、同年七月一日、突然樺太衛生隊に転属を命ぜられたのです。

樺太では、ソ連と国境の近い患者療養所で働いたり、九里飛行場の建設などがありました。また、山火事に動員されたこともありました。スコップを一丁持ち、野宿しながらの出勤です。消火活動は延焼を防ぐために、一定幅のツンドラをはぎとるのです。途中火に囲まれたため、逃げ場を失ったこともありました。大規模な山火事の、燃え上がる炎のすさまじさ、恐ろしさは、今でも忘れることができません。よく生きていたものだと思います。

その頃の日本は、各海域における海軍の壊滅、各地域における陸軍の玉砕、本土への空襲や原爆の投下など、いよいよ敗戦が濃厚になってきていました。そのような状況の中、突然八月八日にソ連が参戦し、樺太の国境でもソ連軍との戦いが始まって、多くの死傷者を出すようになりまし。その後、次々と主要地域に対する爆撃や、艦砲射撃による攻撃が激しくなってきました。中でも身近な地域である真岡町に対する艦砲射撃は、夜空が明けると絶え間なく砲撃の音が聞こえてくるほどすさまじいものでした。夜が更ける頃、トラックの荷台に、まるで鮪でも積むように運ばれてきた負傷者の中には、すでに息絶えている者や手足が切断されて

○真岡 まおか 日本が樺太を領有していた時に、樺太南西部に位置した町。表紙裏地図 📍

いる者もいて、苦痛による呻き声うめが辺りに満ちていました。私たち衛生兵えいせいへいは、これらの負傷者の治療ちりょうに懸命けんめいに働きました。片足のない将校しょうこうから「殺してくれ」と刀を差し出されたこともありました。

八月十五日正午には、戦争終結しゅうけつのラジオ放送を聞きました。みんな茫然ぼうぜんと立ち尽くしていましたが、同時にやっと終わったのかという思いもありました。

八月二十三日には、ソ連の部隊が豊原とよはらに到着。

○豊原 とよはら 表紙裏地図 📍

二十五日には、ソ連軍の指令で武装解除ぶそうかいじょが行われました。豊原市とよはらにいる日本の兵隊は市内の広場に集められて、持っている全ての武器をソ連軍に差し出しました。丸腰まるこしになった私たちは、市内の学校に收容しゅうようされ、ここで正式に抑留よくりゅうの身となりました。これが、これから長く続く捕虜生活ほりよの幕開けでした。

○大泊 おわたまり 表紙裏地図 📍

数日後の九月十三日、豊原とよはらから大泊おわたまりへ行くことになりました。暑い上に十分な食料もなく、体力がどんどん落ちていきました。大泊おわたまりでは、荷物運かものびの重労働が待ち受けていました。港にある貨物船かものから、重さ六十キロもの小麦粉の袋かを担いで運ぶのです。その頃の食事は、大豆やとうもろこし



イメージ図

「殺してくれ」と刀を差し出す軍人

忘れられないぬくもり

○利尻富士 北海道の利尻島にある利尻山の別称。標高一七二二メートル。

○海馬島 樺太の南西にある島。表紙裏地図

○シベリア 表紙裏地図

○リンチ 法によらない私的制裁。私刑。

の混じったもので、米粒は数えるほどしか入っていませんでした。十月に入り、北海道に帰るといふことで、捕虜たちが船に乗せられ、大泊港を出港しました。航海途中で利尻富士が見えてきて喜んだのも束の間、船はくるりと向きを変えて樺太の海馬島が見えてきました。落ち込み悲しい気持ちになりました。

夜が明け、日本のものとは明らかに違う異なる様な汽笛の音に目が覚めました。陸を見ると、大きな機関車と白壁の住居が点々と見え、これがシベリアかと観念しました。このときの、皆の暗い表情は今でも忘れることができません。上陸して最初の仕事は港の鉄道建設工事でした。作業の辛さもありましたが、慣れない気候や粗末で少量の食べ物、さらに精神的な不安を抱えた中での集団生活は、多くの事故を引き起こしました。

病気で倒れる者、怪我、脱走、盗難、リンチなどが起こるつらい日々が続きましたが、それにも増して辛かったのが、シベリアの厳しい寒さでした。真冬の気温は、零下三十度は当たり前で、零下四十度以下に下がるこ



ソ連人監督との握手

イメージ図

○凍傷 強度の寒気が人体に作用して、全身又は局所に起こる傷害。

○栄養失調 食物の摂取不足、又は摂取は十分でも消化・吸収の悪いときやタンパク質などの摂取不足により現れる異常状態。浮腫、貧血、下痢などを伴う。

とも珍しくありませんでした。風が吹くと、冷たさよりも針で刺されるような痛みを感じ、ちよつとでも油断すると手足はもちろん、顔まで凍傷になってしまいます。また、食料が質量とも制限され、労働に次ぐ労働で、その間栄養失調になり、骨と皮の身体となりました。

私は建築関係の小隊長と中隊長を経験しました。ソ連の監督と話し合い、私たちの仕事をいかに高く評価してもらうかに苦労しました。仕事の出来は翌日の食事量に影響するのです。それだけに毎日の作業終了後、片言のロシア語で行う交渉に一喜一憂する毎日でした。監督はソ連の民間人でしたが、大変人柄のよい、人情味のある人でした。全てが厳しい捕虜生活の中で、この監督には善意をもっていろいろと気を配ってもらいました。国同士は争いましたが、一人一人を見れば、このように優しい人もいます。

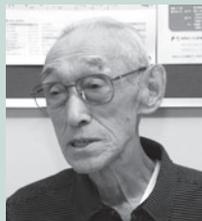
昭和二十四（一九四九）年六月、思いがけず突然の帰国命令があった際に、この監督は涙を流して喜んでくれました。別れ際には私の手を握ってくれました。そのぬくもりは今でも忘れられない思い出ですし、長い抑留生活の中で、ただ一つ、心に安らぎを与えてくれたものです。

最後に、戦争を経験してきた身として、子どもたちに伝えたいことがあります。かつて、戦争がどうして起きたのか、そのわけを考えてほしい。当時、政治的にいろいろなことが起こりましたが、国民は無関心だったように思います。政治は大事です。そして、それを監視する役目は国民にあります。今後の日本の進む道を、しっかりと見つめてほしいと思います。

DATA

平成22年度豊平区平和事業  
聞き取り

- ・平成22年9月10日
- ・月寒体育館



松山四郎(まつやま・しろう)さん

- ・大正10(1921)年生まれ
- ・札幌市豊平区在住

忘れられないぬくもり